

図書紹介・New Publications

魚類学雑誌 67(1):137-137
2020年4月25日発行

海洋生物学マニュアル。一村山 司・野原健司・庄司隆行・田中 彰（編著）。2019。東海大学出版部。神奈川。vii + 115 pp. ISBN978-4-486-02112-4。2,400円（税別）。本書は、海洋生物に関する分野を専攻する大学の学部生など初学者を主な対象として、海洋生物の生態の理解を目的とした実験・実習・調査・研究について幅広く簡潔にまとめている。全体としては、大きく総論と各論の2部から構成されている。総論には、「地球のかたち、海のすがた」と「海洋生物とは」の二つがあり、「地球のかたち、海のすがた」では、地球の構造、海底地形、海流、海中の光や温度など、物理的・化学的特性について、「海洋生物とは」では、生産者、消費者、分解者のカテゴリーごとに分け、植物プランクトンなどの微細生物から鯨類などの大型哺乳類まで、海洋に生息する多くの生物群について概説してある。広範囲な内容がとてもコンパクトにまとめられており、初学者が海洋構造と生物群の全体像を容易に把握できるものになっている。

各論には、全リン測定、無脊椎動物や魚類の形態観察、DNA分析などの学生実験で行われるような内容が多数掲載されている。そして、それらには実験の使用機材や手順だけでなく、結果のまとめ方や考察のポイントなども記述されており、学部生が実験内容を理解・実施するのに適している。なお、理系の生物系分野では教養科目で基本的な生物実験を履修することから、解剖器具や顕微鏡の使用などには割愛されている。このような室内で講義として行われる実験・実習の内容以外に、講義として行うには時間的・空間的に難しいフィールド調査などに関する内容も豊富に含まれていることは、本書の特筆できる点だと思われる（例えば、沿岸における生態学的調査方法、市場調査、野外での行動や生態の観察など）。これらには、執筆者の経験が反映されたかなり具体的な内容も盛り込まれているため、卒業研究の際に有用であるだけでなく、学生自身が何か明らかにしたい事象を見つけた際に、調査の組み立て方や観察の仕方など、実際にフィールドでどのように取り組んでいくべきかを想像しやすくなると思われる、解決への指針となるであろう。

魚類に関することとしては、魚類学の基礎となる標本作製や形態観察、繁殖生態や生活史を理解するうえで重要な生殖腺観察や年齢査定、行動生態を研究するための野外観察や室内実験など広く書かれている。基本的に各項目は初学者向けに簡潔にまとめられているため、魚類学雑誌の読者には物足りないかもしれない。しかし、標本作製などには、他書では見られない細かな注意点やコツが記述しており、一読の価値がある。

本書は初学者を対象としたものであるが、一般市民もしくは学部生などを対象とした実験・実習内容を考える際にも参考になるため、大学や博物館などの教育に携わる人にもお勧めできる良書である。

（高見宗広 Munehiro Takami；〒424-8610 静岡県静岡市清水区折戸3-20-1 東海大学海洋学部水産学科生物生産学専攻 e-mail: mtakami@tsc.u-tokai.ac.jp）

魚類学雑誌 67(1):137-138
2020年4月25日発行

岐阜県の魚類 第二版。一向井貴彦（編著）。2019。岐阜新聞社、岐阜。223 pp. ISBN 978-4-87797-280-6。3,700円（税別）。海産魚を含めた都道府県の魚類に関する書籍は複数あるが、淡水魚もしくはそれを中心とした内容で市販された書籍となると、私が調べた限りでは21道・県のものがある。その多くが1980年代から90年代にかけて出版されたものであり（稗田、1984；岡山淡水魚研究会、1984；徳島淡水魚研究会、1987；滋賀県立琵琶湖文化館、1991；比婆科学教育振興会、1994）、2000年以降で出版されたものはわずかである（なかがわ水遊園、2010；齊藤、2018）。また、これまで出版されてきた書籍の多くは発行時の内容としては充実しているものの、科学的知見が集積された各都道府県の淡水魚リストすべてが反映されているものは少ない。併せて、近年の新種記載や分類学的再検討、初記録種や外来種の発見などによって特に種名、学名の変更やリスト漏れなどの情報は日を追うごとに古くなっているのが現状である。

そのような中で、著者はこれまで精力的に岐阜県内の淡水魚類相を解明してきたとともに、県内で記録されてきた淡水魚の情報をまとめた岐阜県産魚類目録の見直しを図り、随時更新を行ってきた（向井ほか、2012、2014）。そして、そのまとめの一環として、2017年に本書の初版が出版された（向井、2017）。そのような中で、追加情報が加えられた改訂版がその2年後となる2019年に出版されたことは異例のスピードであるといえる。しかし、この2年間だけでも、改訂にふさわしいほどの変更、追記が行われ、現時点での科学的知見に基づく岐阜県の魚類が明らかにされている。

本書の大きな内容としては、「I. 岐阜県の河川と環境」、「II. 各魚種の解説」、そして24のコラムに分かれている。「I」では、県内の河川の流域ごとの特徴、環境の様子を知ることができる。特に岐阜県には大規模な河川が多く、それらが注目されがちではあるが、人にとっての川、そして水田地帯についても記述されており、面としての水域の重要性や人との関わりについても述べられている。そして、「II」では、岐阜県内の野外で採集、撮影され、確実な証拠のあるものを基本として、著者らが撮影した写真付きで各種が紹介されている。レッドリストのカテゴリーについても、あえて環境省の情報は掲載せず、岐阜県と岐阜市の情報を掲載している。

本書が他の書籍と大きく異なる点は博物館標本に基づく岐阜県産の種や、その後新たな記録として発見された種についても確実に掲載されていることである。私自身も初版制作時には、琵琶湖博物館収蔵標本の中に岐阜県産唯一の確実な記録となるサケの標本があり、微力ながらお手伝いをさせていただいた。著者からこのことを知らされるまでは、その標本が岐阜県産唯一のものであるとは知らず驚いたが、同時に博物館としてこのような資料を収蔵していたことが少しでも役に立った瞬間であった。

また、種名についても著者が長年続けている分子生物学的研究により、県内で確認された種は、どの系統かを明らかに

した上で掲載されているところも大きな特徴である。例えばタモロコについては同種であっても遺伝的に異なる在来系統と国内外来系統が分けて掲載されている。このほか、2017年以降に新種記載された種として、初版ではカマツカ A、カマツカ B と 2 系統に分けて紹介されていたものは、それぞれカマツカとナガレカマツカとして紹介された。同様にナマズ属の 1 種（イワトコナマズ近似種）と紹介されていたものもタニガワナマズとして紹介され、さらに県内における分布が紹介されている。また、本書において県内初記録種としてメナダが報告された。このように本書は単に一般的な読み物や図鑑だけでなく、まさにこの書籍自体が現時点での岐阜県産魚目録であるといえよう。

各魚種の解説については著者の研究などに基づく情報が中心となって収録されており、フィールドにより近い生の情報が得られる。ところどころに、「素人が適当に料理してもおいしく食べることができた（ソウギョ）」など、単に解説があるだけではなく、体験・経験談や県内でよく使われている方言も掲載されている。また、著者を含め、6 名による 24 のコラムも様々な研究成果や体験に基づく内容であり、どれも読んでいて興味深い。さらに、最後には岐阜県で知られる魚の妖怪なども紹介されているうえ、コミカルに現代の良い妖精や悪い妖怪なども紹介されているのは著者のユーモラスな一面がよく表れているのではないだろうか。

岐阜県の魚はアユである。確かに長良川のアユなどは有名であるが、どうしても水産的に有名な魚種が目されやすく、一般的な関心もそちらに偏ってしまいがちである。そのような中で、本書は岐阜県として生物地理学的に非常に重要な種や絶滅のおそれのある種、初記録種など、いかに県内の魚類が多様であり、それぞれに個性があるかということを示してくれる。そして国内・国外を含めた外来種や放流の問題など地域生態系への影響についても警鐘を鳴らしてくれる一冊だろう。岐阜県民はぜひ一度読むべき、というのは言い過ぎかもしれないが、もちろん他道府県の方もぜひ手に取っていただき

たい。また、私を含め、将来このような都道府県レベルの魚類について書籍を作りたいという人、地域や水系の図鑑を作りたいという人にとっても構成が大変参考になるだろう。本書のような一冊の出版、そして改訂版にまで至るプロセスも価値あるものであり、このような事例が他の都道府県にも広がり、各地域でこのような科学的知見に基づく地域の淡水魚図鑑が出版されていくことを期待したい。

引用文献

- 知来 要・斉藤裕也. 2018. 埼玉の淡水魚図鑑. さわらび舎, 蕨. 160 pp.
- 稗田一俊. 1984. 北海道の淡水魚. 北海道新聞社, 札幌. 254 pp.
- 比婆科学教育振興会. 1994. 増補改訂版 広島県の淡水魚. 中国新聞社, 広島. 239 pp.
- 向井貴彦. 2017. 岐阜県の魚類. 岐阜新聞社, 岐阜. 216 pp.
- 向井貴彦・古屋康則・千藤克彦・説田健一. 2012. 岐阜県産魚類目録の再検討. 岐阜県博物館調査研究報告, 33: 29-37.
- 向井貴彦・長野浩文・長野 光・宮島弘佳・千藤克彦・説田健一. 2014. 岐阜県での分布が確認されたボウズハゼおよび証拠を伴う外来種 5 種の記録. 岐阜県博物館調査研究報告, 35: 1-9.
- なかがわ水遊園. 2016. 新とちぎの魚図鑑 増補改訂版. 下野新聞社, 宇都宮. 176 pp.
- 岡山淡水魚研究会. 1984. 岡山の淡水魚. 山陽新聞社, 岡山. 235 pp.
- 滋賀県立琵琶湖文化館. 1991. 湖国びわ湖の魚たち 増補改訂版. 第一法規, 東京. 189 pp.
- 徳島県淡水魚研究会. 1987. 徳島県魚貝図鑑. 徳島新聞社, 徳島. 271 pp.

(金尾滋史 Shigefumi Kanao : 〒 525-0001 滋賀県草津市下物町 1091 滋賀県立琵琶湖博物館 e-mail: kanao-shigefumi@biwahaku.jp)

会員通信・News & Comments

魚類学雑誌 67(1):138-156
2020年4月25日発行

インタビュー

先達に聞く

話し手：川那部浩哉（京都大学名誉教授・滋賀県立琵琶湖博物館初代館長）

聞き手：前川光司、渡辺勝敏

記録：山本祥一郎

2017年9月17日（湯の川温泉 KKR 函館）

2018年3月17日（札幌・中村屋旅館）取材

はじめに

川那部浩哉氏（1932-）は京都大学理学部の教授，同大学生態学研究センターの初代センター長，また滋賀県立琵琶湖博物館の初代館長として，日本の生態学，とりわけ魚類生態学の分野の発展に最も大きな影響を与えた先達の一人である。川那部氏らによって1950年代に開始されたアユの研究は，魚類の社会行動・個体群生態学のパイオニア的研究として位置付けられ，また氏は琵琶湖やアフリカ古代湖における生態・進化研究を牽引し，さらに公害問題や自然保護においても生態学者として大きな役割を果たした。魚類学会においても，長らく評議員として学会の多様な活動を支えてきた。

川那部氏は多くのエッセイを著し（例えば，川那部，